

秋田、沖縄、東京、そしてヨーロッパ

デザイナー（凶案家）への道

柏崎栄助は1910年11月9日、秋田県本荘市に生まれました。生家は米問屋で中学を卒業すると雑貨屋や質屋に奉公に出されますが、いずれも長続きしなかったと言います。

柏崎が、親戚の生駒弘を頼って、初めて沖縄に行くのは1928年。柏崎が18歳の年です。秋田出身の生駒弘は東京美術学校（現・東京藝術大学）漆工科卒業ののち、富山県工業試験場勤務を経て、沖縄県工業指導所（1927年設立）の初代漆器部主任として赴任したところでした。柏崎は東京・麻布の獣医学校に通っていましたが、1929年の秋、生駒のすすめもあり一転して東京美術学校の受験を志します。翌年4月、柏崎は同校凶案科（現・デザイン科）に入学します。本人は試験で精魂つき、発表も知らず、入学式も出席しなかったそうです。

在学中も柏崎は沖縄を訪れ、生駒のもとで漆器のデザインなどを手掛けていました。生駒は1931年に沖縄漆工芸組合（のちの「紅房」）を組織し、地場産業の振興と啓蒙に尽くしていましたが、柏崎とその学友である東京美術学校生らの清新な取り組みは新しい風として評価されることとなります。また、親友であるデザイナー・小池岩太郎が福岡県に就職してからは、福岡にもよく立ち寄ったようです。そして、1935年3月、柏崎は東京美術学校を卒業し、翌年にはヨーロッパに遊学します。

「部屋というよりは深い底の横穴みたいなところだった」といわれる船室での数十日の船旅を経て、ヨーロッパにたどり着いた柏崎はパリやベルリン、ウィーンを訪れます。パリでは1937年のパリ万国博覧会（「現代生活における芸術と技術の国際博覧会」）を訪れ、同地で恩師である東京美術学校凶案科教授・和田三造らと交流しています。ウィーンでは建築家でありデザイナーであるヨーゼフ・ホフマンと会い、紅房の漆器を渡しています。柏崎はホフマンのゼミにも参加しました。それは、着の身着のまま道具や食料もなく山中に置き去りにされるような、非常にユニークなものであったようで、柏崎はのちにこのゼミの思い出を大学の講義などで語っています。その際、「人間は只一人で生まれ、只一人で死んでいく。だが一人では生きられない」と結んだそうです。後に「人間が生きることからデザイナーの仕事は始まるのだ」と記す柏崎の原点の一つと言えるでしょう。